「ゲラサの人を癒やす」　2023年04月14日

悪霊どもはその人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って湖になだれ込み、溺れ死んだ。（ルカ８：33）

成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に知らせた。ゲラサ地方の人々は皆、恐怖に捕らわれ、自分たちのところから出て行ってもらいたいとイエスに願った。（ルカ８：36～37a）

悪霊に取りつかれたゲラサの人の癒しは怪奇的で、あり得ない出来事のように思える。著者ルカは、最初の福音書であるマルコ５章に書かれたものを伝承している。著者たちは、主イエスの立ち位置を明確に記し、福音の本質を明らかにしようとしている。読む者の想像を掻き立てるが、私も想像を膨らませた感想を書きたい。

主イエスの宣教団はガリラヤ湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。そこで、悪霊に取りつかれた男と出会った。彼は、鎖でつながれ、足枷をはめられ監視されていたが、それらを壊し、悪霊によって荒れ野に追いやられ、衣服を身に着けず、墓場を住まいとしていた。町の人々からは恐れられていた。男は主イエスを見ると、ひれ伏し、大声で「いと高き神の子イエス、構わないでくれ。頼むから苦しめないでほしい」と叫んだ。主イエスが汚れた霊にその男から出て行くように命じられたからである。例によって、悪霊は主イエスの本質を見抜き、神の清さと向き合い、自らの汚れに苦しんだのである。主イエスは、「名は何と言うのか」と尋ねると、「レギオン」ですと答えた。レギオンはローマの重武装軍団で、戦場の最前線を突っ走り、人々を死の恐怖に陥れていた。男はレギオンの恐怖を体験し、その霊に取りつかれ、レギオンに成りきっている。悪霊どもは、底なしの淵に行けとの命令ではなく、辺りで豚の群れを飼っていたので、その中に入る許しを願った。主イエスが、お許しになると、悪霊どもは豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って、湖になだれ込み、皆溺れ死んだ。気味の悪い出来事である。レギオンの重武装軍団は、日本の神風特攻隊などがそうであったように、自ら死を目指して突進する。軍隊は周りに死をもたらし、自らも死を以て終結する悪霊であるとのメッセージではないか。

悪霊から解放された男は服を着、正気になって、主イエスの足元に座っていた。町の人々には喜ばしいことであった。しかし、彼が正気に戻るために、豚の群れが犠牲になったことを知り、町から出て行ってもらいたいと願った。ゲラサは異教徒の町で、ユダヤ人が汚れた動物と見なしていた豚を飼っていた。豚は捨てるところがない経済効率のよい家畜である。ゲラサの住民の経済を支える豚を失ったことは、耐えられないと主イエスに出て行くことを求めた。一人の人間の救いより、経済的損失を嫌ったのである。

人を殺し、自らも死に暴走するレギオンという軍隊、そして、人の救いなどに関心なく、豚に固執する営利主義との狭間に、主イエスは立たれ、一人の悪霊に取りつかれた人を救われた。軍隊では人を救えない。経済優先は人との関りを失う。苦しむ一人の人を憐れみ、正気の人間に戻す主イエスの愛が鮮烈に描き出されている。

悪霊から解き放された人は喜び、お供をしたいと願い出た。主イエスは、「自分の家に帰って、神があなたにしてくださったことを、ことごとく話して聞かせなさい」と言われた。彼は立ち去り、主イエスがしてくださったことを、町中に言い広めた。彼は異邦人に福音を伝える最初の人になった。